

医療薬学研究科

(医療薬学専攻)

シラバス

Syllabus 2025



あなたの学びを あなたのカタチに

九州医療科学大学

Kyushu University of Medical Science

科目名	医療倫理学特論			授業コード	220014BDP1	単位数 (時間数)	2 単位 (30)	
配当学科(学年)	医療薬学研究科(1年)			ナンバリング		AL 科目	○	
担当者	前田和彦(生・医)、大倉正道(薬・薬)、鈴木彰人(薬・薬)	開講学期	2025 年度 前期	必修・選択	必 修	授業形態	講 義	
授業の概要・一般 目標・対応するホ リゾンNo.	臨床の場において、薬剤師は医療人として倫理観を滋養していくことが要求される。近年の生命医学の発展は、思いもよらぬ複雑かつ判断が難しい倫理的問題を数多く引き起こしている。そして医療倫理学特論では、臨床及び研究における様々な医療倫理問題の予測、評価、判断ができ、医療人として相応しい行動規範を示すことができる薬剤師の育成を目的とする。したがって本特論では、臨床現場における「～は患者の権利として認められるか」、「～は薬剤師の行動として倫理的妥当性はあるか」、「～の規制の根拠となる制度(法)は何か」等の臨床での実践的問いかけを論理的・社会的・臨床的視点を踏まえた討議を行う。またこれは、臨床現場で臨床現場での服薬指導やインフォームド・コンセントだけではなく、創薬や薬学を含めた生命科学研究全体にも必要な思考である。本特論を通じて受講者は、薬剤師として臨床の場における倫理問題を自己解決できる倫理的思考の習得を目的とする。							
学修目標	1)医療倫理と生命倫理学の学問的経緯と差異を臨床との関連から概説できる。 2)臨床におけるインフォームド・コンセントの必要性と注意点を説明できる。 3)臨床における患者の自己決定権とその問題を説明できる。 4)臨床上の医療契約や医療過誤から生ずる医療従事者の責任と倫理問題を説明できる。 5)疾病が患者に及ぼす倫理的問題を抽出し、必要な態度を示す。 6)薬の製造や服用に関して必要な責任や倫理観を説明できる。 7)生命に関わる倫理的問題を抽出し、説明できる。							
実務経験のある 教員による教育	鈴木は、薬剤師として大学病院等で長年の調剤経験や服薬指導歴を持ち、それを生かした指導を行う。							
評価及びフィード バックの方法	3 回のレポートで 75%、口頭試問 25%を目安として、単位認定を行う。レポートに関しては次回講義時等に講評を行い、フィードバックを行う。							
準備学習・ 履修上の注意等	博士課程でもあり、自ら探求し、講義への準備、復習を行なう等、積極的な態度を望みたい。							
オフィスアワー	月曜～木曜日の昼休み及び材質時は随時(1 号棟 3 階 B-327 医事法学研究室)、メール等での相談については講義時に説明する。							
授業計画								
回数	学修 目標 No.	授 業 内 容					授 業 方 法	担 当
1	1)	医療倫理学と生命倫理学の歴史的変遷を確認し、理解する。					講 義	前 田
2	1)2)	臨床に必要なインフォームド・コンセントの知識を確認し、理解する。					講 義	前 田
3	2)3)	臨床に必要な患者の自己決定権の内容を確認し、理解する。					S D G	前 田
4	3)4)5)	医療契約に関する知識を確認し、理解する。					講 義	前 田
5	3)4)5)	医療契約により生ずる医療従事者の倫理観について討議する。					S D G	前 田
6	3)4)5)	医療過誤とリスクマネジメントに関する知識を確認し、討議する。					S D G	前 田
7	3)4)5)	医療過誤の事例から医療従事者の責任と倫理観について討議する。					S D G	前 田
8	3)5)7)	疾病が患者に及ぼす倫理的問題を確認し、理解する。					講 義	大 倉
9	1)～7)	医療倫理に関する問題を発表し、討議する。					S D G	大 倉
10	3)7)	生命の選択に関わる倫理的問題を討議する。					講 義	前 田
11	5)6)7)	薬と倫理に関する問題を発表し、討議する。					講 義	鈴 木
12	1)～7)	医療倫理に関する問題を発表し、討議する。					S D G	鈴 木
13	1)4)5)	医療従事者の守秘義務と倫理観について確認し、理解する。					講 義	前 田
14	3)5)7)	脳死や臓器移植に関する知識を確認し、理解する。					S D G	前 田
15	3)7)	安楽死や尊厳死の倫理的問題を確認し、理解する。					S D G	前 田
教科書(著者名)出版社名【ISBN】		医事法講[新編第 5 版] (前田 和彦) 信山社(東京)【978-4-7972-8655-7】						
参考書(著者名)出版社名【ISBN】		なし						

科目名	医療薬学研究方法特論			授業コード	220033BDP1	単位数 (時間数)	2 単位 (30)
配当学科(学年)	医療薬学研究科(1年)			ナンバリング		AL 科目	○
担当者	松本貴之(薬・薬)、白崎哲哉(薬・薬)、大倉正道(薬・薬)、金光卓也(薬・薬)、堤敏彦(薬・薬)、渥美聡孝(薬・薬)、田原佳代子(薬・薬)、内田太郎(薬・薬)、長野貴之(薬・薬)、楠瀬直喜(薬・薬) (今年度の担当者は授業計画に記載)	開講学期	2025 年度 前期	必修・選択	必 修	授業形態	講義、演習
授業の概要・一般 目標・対応するポ リン-No.	臨床現場において指導的立場に立てる薬剤師には、医薬品の品質、安全性、有効性を含めた様々な業務上の問題に対処するために、問題点を抽出し検討課題を設定する能力、課題遂行の手法を選択し実施する能力、検討結果を客観的に評価し総括する能力、さらに、成果を公表し社会に還元する能力が求められる。それらの能力を培うための基本的素養として、薬学研究方法特論では、基礎薬学・医療系の英文学術論文および実験調査データ等を題材とし、1 研究の進め方、学術論文の構成、生物学的・化学的な実験手技、2 データの統計学的解析、情報処理、文献データベースの活用、3 医学薬学領域に用いられる英文表記、レポート・論文の作成方法等を学習することで、薬学における研究方法に関する多角的な知識を修得することを目的とする。						
学修目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 学術論文の成り立ちを説明できる。 2) 研究の目的・意義および手法の妥当性を評価できる。 3) 主な生物学的・化学的な実験手技を説明できる。 4) 適切な統計学的検定方法を選択しデータを解析できる。 5) 文献データベースを活用し情報を取捨選択できる。 6) 薬の製造や服用に関して必要な責任や倫理観を説明できる。 7) 研究の目的・意義を英文で表現できる。 						
実務経験のある 教員による教育	特になし。						
評価及びフィード バックの方法	レポート及びプレゼンテーション等を総合的に評価する。						
準備学習・ 履修上の注意等	積極的に質疑応答すること。 毎回課題を出すので、次回の授業までに完成させておくこと。						
オフィスアワー	各授業日 17:00～19:00(各担当者居室)						
授業計画							
回数	学修 目標 No.	授 業 内 容				授 業 方 法	担 当
1	1)7)	論文を読む(1) abstract から研究の全体像を読み取る。				講義、演習	松 本
2	1)2)7)	論文を読む(1) 研究テーマの設定方法を考える。				講義、演習	松 本
3	1)7)	論文を読む(2) abstract から研究の全体像を読み取る。				講義、演習	渥 美
4	1)2)7)	論文を読む(2) 研究テーマの設定方法を考える。				講義、演習	渥 美
5	3)4)	データの成り立ちに合わせた統計学的検定法を選択する。				講義、演習	内 田
6	3)4)	統計学的検定法の概略を説明しデータ解析を実施する。				講義、演習	内 田
7	1)2)3) 7)	論文を読む(1) どのような研究手法・手技があるのかを知る。				講義、演習	堤
8	1)2)4) 7)	論文を読む(1) 研究成果とその意義の伝え方を考える。				講義、演習	堤
9	1)2)3) 7)	論文を読む(2) どのような研究手法・手技があるのかを知る。				講義、演習	長 野
10	1)2)7)	論文を読む(2) 研究成果とその意義の伝え方を考える。				講義、演習	長 野
11	5)	文献・化合物データベースを使う。				講義、演習	田 原
12	5)	研究課題に関連する情報を収集し活用する。				講義、演習	田 原
13	2)6)	研究課題の目的・意義を説明する。				講義、演習	白 崎
14	2)6)7)	研究課題の目的・意義を英文で記す(1)。				講義、演習	白 崎
15	1)2)3) 4)5)6) 7)	まとめ				講義、演習	松 本
教科書(著者名)出版社名【ISBN】	なし						
参考書(著者名)出版社名【ISBN】	必要に応じレジュメを配布。						

科目名	医療薬学総合演習			授業コード	220016BDP1	単位数 (時間数)	2 単位 (30)
配当学科(学年)	医療薬学研究科(4年)			ナンバリング		AL 科目	○
担当者	鈴木 彰人(薬・薬)、高村 徳人 (薬・薬)、徳永 仁(薬・薬)、緒方 賢次(薬・薬)、興梠 靖幸(薬・ 薬)、園田 純一郎(薬・薬)、堤 敏 彦(薬・薬)、白崎 哲哉(薬・薬)、 鳥取部 直子(薬・薬)、長野 貴之 (薬・薬)、楠瀬 直喜(薬・薬)、松 本 貴之(薬・薬)、吉田 裕樹(薬・ 薬)、甲斐 久博(薬・薬)	開講学期	2025 年度 前期	必修・選択	必 修	授業形態	演習・SGD
授業の概要・一般 目標・対応するホ リデーNo.	<p>医療薬学総合演習は、これまで学んできた医薬品の品質、安全性、有効性についての十分な科学的根拠に基づく予測・評価・判断能力を総合的に活用できることを目的とする。即ち、薬剤師業務の中で、レギュラトリーサイエンスの視点に基づき業務を最適化していく能力の向上を目指す。具体的には、病院薬局、保険薬局、在宅医療の各現場における薬剤師業務を、想定される種々の状況に基づいてシミュレーションし、その中での問題点を抽出して検討すべき課題を提起する。さらに、課題解決のための手法の選択ならびにその実践能力、および検討結果を客観的に評価し総括する能力を修得する。</p> <p>ディプロマ・ポリシー(DP)との関連性 DP2(医薬品の品質の予測、評価、判断能力): 寄与率 24% DP3(医薬品の安全性の予測、評価、判断能力): 寄与率 24% DP4(医薬品の有効性の予測、評価、判断能力): 寄与率 24% DP5(臨床現場における論理的思考能力): 寄与率 28%</p>						
学修目標	1) 病院薬局において、レギュラトリーサイエンスの視点に基づき業務を最適化できる。 2) 保険薬局において、レギュラトリーサイエンスの視点に基づき業務を最適化できる。 3) 在宅医療において、レギュラトリーサイエンスの視点に基づき業務を最適化できる。						
実務経験のある 教員による教育	担当教員の半数(鈴木、高村、徳永、緒方、興梠、園田、堤)は医療現場で薬物治療の計画・提案や評価に携わった経験を有している。本授業では、これらの実務経験を活かして医薬品適正使用における品質、有効性、安全性の予測、評価、判断にかかわる能力向上の指導にあたる。						
評価及びフィード バックの方法	口頭発表/質疑応答、またはレポート提出により総括的評価を行い単位認定する。 毎時間終了時にフィードバックを行う。						
準備学習・ 履修上の注意等	授業の前後および休日を利用して、授業 1 コマ当たり約 1 時間以上、関連事項の学習を行うこと。						
オフィスアワー	在室時適宜						
授業計画							
回数	学修 目標 No.	授 業 内 容				授 業 方 法	担 当
1	1)	病院薬局における業務問題の予測ができる。				演 習	鈴 木
2	1)	病院薬局における業務問題の評価ができる。				演 習	鈴 木
3	1)	病院薬局における業務内容の適切性の判断ができる。				演 習	高 村
4	1)	病院薬局における業務の最適化ができる。				演 習	徳 永
5	1)	病院薬局業務における総合的討論				S G D	緒 方
6	2)	保険薬局における業務問題の予測ができる。				演 習	興 梠
7	2)	保険薬局における業務問題の評価ができる。				演 習	園 田
8	2)	保険薬局における業務内容の適切性の判断ができる。				演 習	堤
9	2)	保険薬局における業務の最適化ができる。				演 習	白 崎
10	2)	保険薬局業務における総合的討論				S G D	鳥 取 部
11	3)	在宅医療における業務問題の予測ができる。				演 習	長 野
12	3)	在宅医療における業務問題の評価ができる。				演 習	楠 瀬
13	3)	在宅医療における業務内容の適切性の判断ができる。				演 習	松 本
14	3)	在宅医療における業務の最適化ができる。				演 習	吉 田
15	3)	在宅医療業務における総合的討論				S G D	甲 斐
教科書(著者名)出版社名【ISBN】		使用しない。					
参考書(著者名)出版社名【ISBN】		必要に応じレジュメを配付する。					

科目名	医療分子機能化学特論			授業コード	220018BDP1	単位数 (時間数)	2 単位 (30)	
配当学科(学年)	医療薬学研究科(1・2・3 年)			ナンバリング		AL 科目	○	
担当者	金光 卓也(薬・薬)	開講学期	2025 年度 前期	必修・選択	選 択	授業形態	講義、演習	
授業の概要・一般 目標・対応するホ リゾンNo.	現在使用されている多くの医薬品は、合成又は天然有機化合物であり、それぞれの医薬品分子には様々な官能基と特徴的な基本骨格が存在する。従って、医薬品の適正使用のためには、医薬品の骨格構造と官能基等から、その化学的安定性や反応性等についての品質を予測、評価そして判断できる能力が求められる。さらに、調剤においては、医薬品の物性変化や薬理作用の低下を防ぐために化学的相互作用(配合変化および体内における相互作用)による品質を予測、評価そして判断することも不可欠である。医療分子機能化学特論では、合成医薬品や天然医薬品の危険な相互作用を未然に防ぐために、代表的な複素環を有する合成および天然物医薬品、ペプチド医薬品、核酸医薬品、糖医薬品等、医薬品分子の骨格構造および官能基の機能を化学的に解析でき、医薬品の品質の予測、評価そして判断できる能力を培うことを目的とする。							
学修目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 医薬品に含まれる代表的な官能基を列挙し、その代表的な性質と反応性について説明できる。 2) 医薬品として複素環化合物が繁用される根拠を説明できる。 3) コンピューターソフトを用いて医薬品の立体構造および受容体との相互作用をシミュレートできる。 4) 代表的な複素環化合物を含む合成および天然物医薬品を列挙し、骨格構造と官能基に関連付けてそれぞれの作用機序を化学的に説明できる。 5) 代表的なペプチド、核酸および糖医薬品を列挙し、骨格構造と官能基に関連付けてそれぞれの作用機序を化学的に説明できる。 							
実務経験のある 教員による教育	特になし							
評価及びフィード バックの方法	レポートおよび口頭発表を総合的に評価する。詳細の評価基準は、第1回の講義で説明する。							
準備学習・ 履修上の注意等	予習復習は、授業の前後および休日を利用して、約1時間 / 講義 × 15回 = 約15時間以上必ず行うこと。							
オフィスアワー	月曜日～金曜日 10:00～18:00 場所:M-4号棟 6階 薬化学講座							
授業計画								
回数	学修 目標 No.	授 業 内 容					授業 方法	担当
1	1)	医薬品に含まれる官能基の化学的性質に関する知識を確認し、理解する。					講義・演習	金 光
2	2)	複素環と医薬品のかかわりを理解する。					講義・演習	金 光
3	3)	代表的な複素環医薬品の立体構造をシミュレートして、理解する-1。					講義・演習	金 光
4	3)	代表的な複素環医薬品の立体構造をシミュレートして、理解する-2。					講義・演習	金 光
5	3)	複素環医薬品の立体構造のシミュレーションに関するレポートを作成する。					講義・演習	金 光
6	3)	複素環医薬品と受容体との相互作用をシミュレートして、理解する-1。					講義・演習	金 光
7	3)	複素環医薬品と受容体との相互作用をシミュレートして、理解する-2。					講義・演習	金 光
8	3)	複素環医薬品と受容体との相互作用のシミュレーションに関するレポートを作成する。					講義・演習	金 光
9	1), 2)	医薬品の開発、医薬品の構造活性相関に関して理解を深める-1。					講義・演習	金 光
10	1), 2)	医薬品の開発、医薬品の構造活性相関に関して理解を深める-2。					講義・演習	金 光
11	1), 2), 4), 5)	ペプチドや糖類の医薬品の論文を検索し、作用機序を調べて討議する-1。					講義・演習	金 光
12	1), 2), 4), 5)	ペプチドや糖類の医薬品の論文を検索し、作用機序を調べて討議する-2。					講義・演習	金 光
13	1), 2), 4), 5)	論文を読み、内容についてレポートを作成し、討議する-1。					講義・演習	金 光
14	1), 2), 4), 5)	論文を読み、内容についてレポートを作成し、討議する-2。					講義・演習	金 光
15	1), 2), 4), 5)	研究発表を聞き発表内容について討議する。					講義・演習	金 光
教科書(著者名)出版社名【ISBN】	特になし。							
参考書(著者名)出版社名【ISBN】	必要に応じレジュメを配布。							

科目名	東洋医薬学特論		授業コード	220019BDP1	単位数 (時間数)	2 単位 (30)
配当学科(学年)	医療薬学研究科(1・2・3 年)		ナンバリング		AL 科目	○
担当者	渥美 聡孝(薬・薬)	開講学期	2025 年度 前期	必修・選択	選 択	授業形態 講義、実習、SGD
授業の概要・一般 目標・対応するホ リソーNo.	<p>本講義では、高度高齢社会における多様な医療ニーズに対応するため、東洋医薬学の基本的な理論と実践的な活用方法について学ぶ。特に、生薬や漢方薬の品質評価、薬効の予測・判断、および臨床応用に焦点を当て、現代医療における代替・補完医療としての役割を理解することを目的とする。</p> <p>具体的には、漢方処方全体もしくは漢方処方に含まれる各生薬の基本的性質や品質に関する要素を学び、科学的根拠に基づいた評価能力を養う。また、生薬・漢方薬の臨床効果や副作用の予測、適切な投薬法の判断を行うための知識を習得し、実践的な医療現場において応用できる力を培う。さらに、論理的思考に基づいた医療判断を行い、患者一人ひとりに適した治療を提供できる能力を養成する。</p> <p>ディプロマ・ポリシー(DP)との関連性 本講義は、以下のディプロマ・ポリシー(DP)と強く関連する。 DP2(医薬品の品質の予測、評価、判断能力):30% 生薬および漢方薬の品質に関する科学的根拠を学び、品質の評価・判断ができる能力を養う。 DP4(医薬品の有効性の予測、評価、判断能力):50% 漢方薬の薬効や臨床応用に関する知識を深め、患者ごとに適切な漢方薬を選択・評価する力を身につける。 DP5(臨床現場における論理的思考能力):20% 漢方薬の投薬判断において、論理的思考を用いた適切な臨床判断を行う能力を養成する。</p>					
学修目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 代表的な漢方処方について、それぞれに含まれる生薬の基本的性質、薬効、および科学的根拠に基づいた臨床応用の可能性を説明できる。 2) 生薬の品質を決定する要因を理解し、それらが医薬品の品質に与える影響を科学的に説明できる。 3) 漢方薬に含まれる天然物の有用性と、医薬品としての適用可能性について、エビデンスに基づいて評価できる。 4) 代替・補完医療としての漢方の役割を理解し、他の医療との相互作用や統合医療の視点からその有効性を論理的に説明できる。 5) 漢方薬の服薬指導に必要なエビデンスを論文ベースで収集・整理し、科学的根拠に基づいた患者指導用資料を作成できる。 6) 研究論文の批判的読解を通じて、漢方薬に関するエビデンスを分析し、臨床現場での適切な投薬判断を行う能力を身につける。 7) 自ら選択した漢方薬に関する研究成果を論理的にまとめ、発表資料を作成し、専門的な視点からプレゼンテーションを行うことができる。 					
実務経験のある 教員による教育	特になし					
評価及びフィード バックの方法	<p>プレゼンテーションの発表内容をルーブリック表を用いて評価する。 ルーブリック表は最初の授業で配布し、評価方法について共有する。 プレゼンテーションの作成時、適宜教員が確認をしてフィードバックを行う。</p>					
準備学習・ 履修上の注意等	<p>自主的に課題を見だし、それを解明する態度が必要である。 授業時間外に 15 時間の学習を行うこと。</p>					
オフィスアワー	月曜日～金曜日 16 時～18 時。M-604 室にて行う。					
授業計画						
回数	学修 目標 No.	授 業 内 容			授業 方法	担当
1	1), 2), 3), 4)	漢方処方に関する論文の紹介を受け、論文の内容から服薬指導への活かし方を習う。1			講 義	渥 美
2	1), 2), 3), 4)	漢方処方に関する論文の紹介を受け、論文の内容から服薬指導への活かし方を習う。2			講 義	渥 美
3	1), 2), 3), 4)	漢方処方に関する論文の紹介を受け、論文の内容から服薬指導への活かし方を習う。3			講 義	渥 美
4	1), 2), 3), 4)	漢方処方に関する論文の紹介を受け、論文の内容から服薬指導への活かし方を習う。4			講 義	渥 美
5	1), 2), 3), 4)	漢方処方に関する論文の紹介を受け、論文の内容から服薬指導への活かし方を習う。5			講 義	渥 美
6	1), 2), 3), 4)	漢方処方に関する論文の紹介を受け、論文の内容から服薬指導への活かし方を習う。6			講 義	渥 美
7	5), 6), 7)	漢方薬や生薬に関するエビデンスを収集し、服薬指導に役立つプレゼンテーションの資料を作成する。1			講義・演習	渥 美
8	5), 6), 7)	漢方薬や生薬に関するエビデンスを収集し、服薬指導に役立つプレゼンテーションの資料を作成する。2			講義・演習	渥 美
9	5), 6), 7)	漢方薬や生薬に関するエビデンスを収集し、服薬指導に役立つプレゼンテーションの資料を作成する。3			講義・演習	渥 美
10	5), 6), 7)	漢方薬や生薬に関するエビデンスを収集し、服薬指導に役立つプレゼンテーションの資料を作成する。4			講義・演習	渥 美
11	5), 6), 7)	漢方薬や生薬に関するエビデンスを収集し、服薬指導に役立つプレゼンテーションの資料を作成する。5			講義・演習	渥 美
12	5), 6), 7)	漢方薬や生薬に関するエビデンスを収集し、服薬指導に役立つプレゼンテーションの資料を作成する。6			講義・演習	渥 美
13	5), 6), 7)	漢方薬や生薬に関するエビデンスを収集し、服薬指導に役立つプレゼンテーションの資料を作成する。7			講義・演習	渥 美
14	5), 6), 7)	漢方薬や生薬に関するエビデンスを収集し、服薬指導に役立つプレゼンテーションの資料を作成する。8			講義・演習	渥 美

15	5), 6), 7)	作成したプレゼンテーションを基に漢方薬の服薬指導に役立つエビデンスベースの発表を行う。	S G D	渥 美
教科書(著者名)出版社名【ISBN】		なし		
参考書(著者名)出版社名【ISBN】		なし		

科目名	臨床分析化学特論			授業コード	220020BDP1	単位数 (時間数)	2 単位 (30)
配当学科(学年)	医療薬学研究科(1・2・3 年)			ナンバリング		AL 科目	○
担当者	田原佳代子(薬・薬)、徳永仁(薬・薬)、金光卓也(薬・薬)、内田太郎(薬・薬)	開講学期	2025 年度 前期	必修・選択	選 択	授業形態	講義、SGD
授業の概要・一般 目標・対応するホ リゾンNo.	質の高い「オーダーメイド医療」実現のためには、臨床現場における科学的分析技術を用いた予測、評価そして判断が必要であり、定性・定量のための分析技術は必須となっている。また、科学的な分析技術に基づいた品質の予測、評価、判断は、臨床現場における医薬品の適正使用のみでなく、その製造過程や保存においても不可欠である。医薬品の体内薬物濃度測定を含むそれらの技術の発展には目覚ましいものがあるが、きめの細かいオーダーメイド医療を実現するためには、臨床薬剤師が、個々の分析対象について最適な分析方法を開発する能力を備えていることが望ましい。本特論では、臨床分析に用いられる様々な分析技術の原理と実際の応用例について学び、臨床現場で必要とされる分析法開発能力の修得を目標とする。						
学修目標	1) 臨床分析の分野で用いられる代表的な分析法を列挙できる。 2) 生体試料の取り扱い、前処理法について概説できる。 3) 治療的薬物モニタリング(TDM)の意義と、TDM に用いられる主な分析法(イムノアッセイと HPLC)の原理および応用例について概説できる。 4) 臨床分析で汎用されている分離分析法(HPLC と電気泳動)の実施法と応用例を概説できる。 5) 臨床分析で用いられている主な検出法について概説できる。 6) 臨床分析に関する英文の論文に書かれている内容を概説できる。 7) 分析対象物の測定法に関する論文を検索し、最適な論文を選択し、その内容を概説できる。						
実務経験のある 教員による教育	教員個々の専門性に応じた指導を行う。						
評価及びフィード バックの方法	教員ごとに課題や SQL を通して評価を行い(各教員 25%計 100%)、単位認定を行う。						
準備学習・ 履修上の注意等	薬学部薬学科の分析化学や応用機器分析学に相当する内容を理解しておくことが望ましい。研究には、何らかの分析手法を用いることが多く、研究に関する論文講読をする際、記載内容を理解・評価する上で、分析方法の理解は重要である。自身の研究課題とその関連分野に興味をもち、自己研鑽に努め、レポート課題や SGD の準備等と合わせ、30 時間程度の授業時間外学習を行うこと。						
オフィスアワー	毎週水曜日 17:00～19:00						
授業計画							
回数	学修 目標 No.	授 業 内 容				授 業 方 法	担 当
1	1)	臨床分析の意義や役割を確認し、分析方法の特徴を理解する。				講義・SGD	全 員
2	1), 2)	生体試料の取扱い法を確認し、最新の前処理法について検索し、討議する				講義・SGD	全 員
3	1)～7)	臨床分析の方法に関する最新の研究内容を検索し、討議する。				講義・SGD	全 員
4	2)～5)	免疫反応を用いた分析法の原理、実施応用例について学ぶ。				講義・SGD	全 員
5	1)～5)	生体試料の取扱い法と分析方法について実地に学び、討論する。				講義・SGD	全 員
6	2)～5)	治療的薬物モニタリング(TDM)の分析方法に関する問題点を挙げ討議する。				講義・SGD	全 員
7	1)～7)	臨床分析に関連する最新の英文論文を検索し、選択して討議する。				講義・SGD	全 員
8	1)～7)	論文を読み内容について討議する。				講義・SGD	全 員
9	1)～7)	論文を読み内容について討議する。				講義・SGD	全 員
10	1)～7)	学習の主題との関連から、論文の内容を要約し、発表して討議する。				講義・SGD	全 員
11	1)～7)	学習の主題との関連から、論文の内容を要約し、発表して討議する。				講義・SGD	全 員
12	1)～7)	学習の主題についてレポートを作成して討議する。				講義・SGD	全 員
13	1)～7)	学習の主題についてレポートを作成して討議する。				講義・SGD	全 員
14	1)～7)	学習の主題について発表して討議する。				講義・SGD	全 員
15	1)～7)	学習の主題について発表して討議する。				講義・SGD	全 員
教科書(著者名)出版社名【ISBN】		特定の教科書は使用しない					
参考書(著者名)出版社名【ISBN】		必要に応じてレジュメを配布する					

科目名	応用薬剤学特論			授業コード	220021BDP1	単位数 (時間数)	2 単位 (30)
配当学科(学年)	医療薬学研究科(1・2・3 年)			ナンバリング		AL 科目	○
担当者	鈴木 彰人(薬・薬)、堤 敏彦(薬・薬)、日高 宗明(薬・薬)	開講学期	2025 年度 前期	必修・選択	選 択	授業形態	講義、SGD
授業の概要・一般 目標・対応するポ リシーNo.	<p>医薬品は不安定な構造をもつものが多く、その品質の予測、評価そして判断できる能力は、医薬品の適正使用において不可欠となる。ドラッグデリバリーシステム(DDS)は剤形や化学構造に工夫を施す技術であり、DDS を活用した製剤を投与する際は製剤学的特徴に基づいて安定性を予測し、薬物が作用部位において十分な活性を発現することを判断できる能力が重要である。また、薬物が投与部位から作用部位に到達するためには多くの生体膜バリアーを通過しなければならず、生体膜の構造、生体膜中への薬物の分布状態などを判断できる能力も薬物の品質確保に大きく貢献する。また、バイオ医薬品は組換え体細胞、非組換え体細胞のタンパク質発現系から培養によって産生されるタンパク質、ペプチド、およびそれらの誘導体であり、高度な技術で精製される。そのため有効性や安全性、さらには安定性に影響する特性を理解するために、分子の持つ性質を詳細に把握することが重要である。医薬品開発および市場は、低分子医薬品からバイオ医薬品へ年々シフトしている。</p> <p>応用薬剤学特論では、薬物の安定化、リボソームなどのドラッグキャリアーの開発と物性評価などの知識と技術、医薬品の開発と薬物治療への応用として薬物の分布状態を測定、評価、判断できる能力を培うことを目的とする。</p> <p>ディプロマ・ポリシー(DP)との関連性 DP2(医薬品の品質の予測、評価、判断能力): 寄与率 100%</p>						
学修目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 薬物分解反応の速度論を概説できる。 2) 薬物の安定化のための各種化学的、物理的手法について概説できる。 3) ドラッグデリバリーシステムについて概説できる。 4) 主な医薬品(薬物)のドラッグデリバリーシステムを提案し討議できる。 5) 生体膜の構造、生体膜バリアー、膜透過について概説できる。 6) 薬物動態について説明できる。 7) 主な医薬品(薬物)の安定化方法を提案し討議できる。 8) バイオ医薬品について概説できる。 9) バイオ医薬品の安定性(構造変化、安定化技術)について概説できる。 10) バイオ医薬品の品質評価・管理について概説できる。 						
実務経験のある 教員による教育	担当教員はいずれも医療現場で薬物治療の計画・提案や評価に携わった経験を有している。本授業では、これらの実務経験を活かして医薬品適正使用における医薬品の品質管理、治療効果や安全性の予測、評価、判断にかかわる能力向上の指導にあたる。						
評価及びフィード バックの方法	口頭発表/質疑応答、またはレポート提出により総括的評価を行い単位認定する。 毎時間終了時にフィードバックを行う。						
準備学習・ 履修上の注意等	授業の前後および休日を利用して、授業 1 コマ当たり約 1 時間以上、関連事項の学習を行うこと。						
オフィスアワー	在室時適宜						
授業計画							
回数	学修 目標 No.	授 業 内 容				授 業 方 法	担 当
1	1)2)	薬物の分解反応に関する知識を確認し、理解する。				講 義	日 高
2	3)	ドラッグデリバリーシステム(DDS)に関する知識を確認し、理解する。				講 義	日 高
3	3)	DDS に関する研究内容を検索し、討議する。				S G D	日 高
4	2)3)	DDS に関する論文を読み、内容について討議する。				S G D	日 高
5	2)~4)	薬物の安定化、DDS に関する問題点をあげ、課題を設定して討議する。				S G D	日 高
6	1)2)	薬物の分解反応と安定化に関する研究内容を検索し、討議する。				S G D	堤
7	5)6)	生体膜、膜透過、薬物動態に関する知識を確認し、理解する。				講 義	堤
8	5)6)	生体膜、膜透過、薬物動態に関する研究内容を検索し、討議する。				S G D	堤
9	5)6)	生体膜、膜透過、薬物動態に関する論文を読み、内容を討議する。				S G D	堤
10	5)~7)	薬物の安定化、生体膜、膜透過に関する問題点をあげ、課題を設定して討議する。				S G D	堤
11	8)	バイオ医薬品に関する知識を確認し、理解する。				講 義	鈴 木
12	9)	バイオ医薬品の安定性および安定性の評価法に関する知識を確認し、理解する。				講 義	鈴 木
13	10)	バイオ医薬品の品質評価・管理に関する研究論文を検索し、討議する。				S G D	鈴 木
14	2)9)10)	バイオ医薬品の規格及び試験法に関する論文を読み、内容を討議する。				S G D	鈴 木
15	8)~10)	バイオ医薬品の薬物動態と品質特性に関する問題点をあげ、課題を設定して討議する。				S G D	鈴 木
教科書(著者名)出版社名【ISBN】		なし					
参考書(著者名)出版社名【ISBN】		必要に応じレジュメを配付する。					

科目名	医療薬学基礎演習 I			授業コード	220022BDP1	単位数 (時間数)	2 単位 (30)
配当学科(学年)	医療薬学研究科(1・2・3 年)			ナンバリング		AL 科目	○
担当者	金光卓也(薬・薬)、鈴木彰人(薬・薬)、徳永仁(薬・薬)、日高宗明(薬・薬)、渥美聡孝(薬・薬)、堤敏彦(薬・薬)、田原佳代子(薬・薬)、内田太郎(薬・薬) (今年度の担当者を授業計画に記載)	開講学期	2025 年度 後期	必修・選択	必修	授業形態	SGD, 演習
授業の概要・一般目標・対応するポリシーNo.	医療薬学基礎演習 I では、これまで学んできた医薬品の品質についての十分な科学的根拠に基づく予測・評価・判断能力を総合的に活用できることを目的としている。即ち、薬剤師業務の中で、レギュラトリーサイエンスの品質の概念に基づき業務を最適化していく能力の向上を目指す。具体的には、医療現場での種々の設定におけるシミュレーションを演習形式で体験し、病院薬局、保険薬局、在宅医療の場において、問題点を抽出し検討課題を設定でき、課題遂行の手法を選択し実施する能力、検討結果を客観的に評価し総括する能力を修得する。						
学修目標	1) 病院薬局において、レギュラトリーサイエンスの品質の概念に基づき業務を最適化できる。 2) 保険薬局において、レギュラトリーサイエンスの品質の概念に基づき業務を最適化できる。 3) 在宅医療において、レギュラトリーサイエンスの品質の概念に基づき業務を最適化できる。						
実務経験のある教員による教育	堤敏彦(薬・薬)、鈴木彰人(薬・薬)、徳永仁(薬・薬)、日高宗明(薬・薬)						
評価及びフィードバックの方法	レポートおよび口頭発表を総合的に評価する。詳細の評価基準は、第 1 回の講義で説明する。						
準備学習・履修上の注意等	前もって、各担当の先生から内容の予習復習に関して指示があるので、その指示に従うこと。予習復習は、授業の前後および休日を利用して、約1時間 / 講義 × 15回 = 約15時間以上必ず行うこと。						
オフィスアワー	各担当教員のオフィスアワーと同じである。						
授業計画							
回数	学修目標 No.	授 業 内 容				授業方法	担当
1	1)	病院薬局業務における医薬品の品質予測ができる。				演習	金光
2	1)	病院薬局業務における医薬品の品質評価ができる。				演習	金光
3	1)	病院薬局業務における医薬品の品質の判断ができる				演習	金光
4	1)	病院薬局業務における医薬品の品質の最適化ができる。				演習	堤
5	1)	病院薬局業務における医薬品の品質を総合的に討議する。				SGD	堤
6	2)	保険薬局業務における医薬品の品質予測ができる。				演習	徳永
7	2)	保険薬局業務における医薬品の品質評価ができる。				演習	徳永
8	2)	保険薬局業務における医薬品の品質の判断ができる。				演習	日高
9	2)	保険薬局業務における医薬品の品質の最適化ができる。				演習	日高
10	2)	保険薬局業務における医薬品の品質を総合的に討議する。				SGD	渥美
11	3)	在宅医療業務における医薬品や品質安全性予測ができる。				演習	渥美
12	3)	在宅医療業務における医薬品の品質評価ができる。				演習	田原
13	3)	在宅医療業務における医薬品品の品質の判断ができる。				演習	田原
14	3)	在宅医療業務における医薬品の品質の最適化ができる。				演習	内田
15	3)	在宅医療業務における医薬品の品質を総合的に討議する。				SGD	内田
教科書(著者名)出版社名【ISBN】	なし						
参考書(著者名)出版社名【ISBN】	必要に応じレジュメを配布。						

科目名	免疫化学療法学特論			授業コード	220023BDP1	単位数 (時間数)	2 単位 (30)
配当学科(学年)	医療薬学研究科(1・2・3 年)			ナンバリング		AL 科目	○
担当者	吉田裕樹(薬・薬)、木村博昭(薬・薬)	開講学期	2025 年度 後期	必修・選択	選 択	授業形態	演習、SGD
授業の概要・一般 目標・対応するホ ルンNo.	臨床現場では、過度の免疫反応や自己組織に対する誤った免疫反応によるアレルギーや自己免疫疾患について正しく理解・評価するために、免疫化学療法的知識や技能が必修となる。免疫化学療法学特論では、アレルギーなど免疫疾患を引き起こす可能性の予測、評価、判断する能力を養い、病態や薬効を客観的に評価することで医療の実践と進歩に貢献できる薬剤師となるために、免疫系の構成、抗原認識の原理などの基礎知識や概念、免疫担当細胞や組織、免疫あるいは生体防御の仕組みを理解して、過度の免疫反応や自己組織に対する誤った免疫反応によるアレルギーや自己免疫疾患の予測、評価、そして判断ができる能力を修得する。						
学修目標	1) 免疫あるいは生体防御の仕組みを概説できる。 2) アレルギー疾患や自己免疫疾患の病態を概説できる。 3) 各免疫系疾患について、治療薬に求められる作用機序を病態に基づき説明できる。 4) 主な免疫系疾患治療薬の副作用や使用上の問題点を列挙できる。 5) 主な免疫系疾患治療薬の副作用の発現機序を説明できる。 6) 主な免疫系疾患治療薬について、副作用の発現を病態と併用薬の観点から推測できる。 7) 主な免疫系疾患治療薬について、副作用を防止・改善する方法を討議し説明できる。						
実務経験のある 教員による教育	科目担当者(吉田)は、臨床現場や研究機関での実務経験に基づき、臨床現場で必要な基礎知識・技能の修得を目的とした授業を行う。						
評価及びフィード バックの方法	毎授業後に行う簡単な口頭試問やレポートにより、学習の進捗状況を把握し、フィードバックを行う。学習への取り組み姿勢(レポート、プロダクト評価や口頭試問時の理解度、授業態度)の評点を 100%として単位認定を行う。評価の基準は授業開始日に説明する。						
準備学習・ 履修上の注意等	基礎知識を含めて毎回の授業での疑問点があれば些細なことでも質問するなどしてすぐに解決する態度が必要である。授業時間外に 15 時間の学習を行うこと。						
オフィスアワー	各担当教員のオフィスアワーと同じである。						

授業計画				
回数	学修 目標 No.	授 業 内 容	授 業 方法	担 当
1	1)~7)	がん免疫に関係する薬物治療や副作用について調査し、討議する。	演習・SGD	木 村
2	1)~7)	がん免疫に関係する薬物治療や副作用について調査し、討議する。	演習・SGD	木 村
3	1)~7)	がん免疫に関係する薬物治療や副作用について調査し、討議する。	演習・SGD	木 村
4	1)~7)	がん免疫に関係する薬物治療や副作用について調査し、討議する。	演習・SGD	木 村
5	1)~7)	自己免疫疾患の発生機序について調査し、討議する。	演習・SGD	木 村
6	1)~7)	自己免疫疾患の発生機序について調査し、討議する。	演習・SGD	木 村
7	1)~7)	自己免疫疾患の発生機序について調査し、討議する。	演習・SGD	木 村
8	1)~7)	アレルギー疾患や自己免疫疾患の薬物治療に関する最新の論文を読み、内容について討議する。	演習・SGD	吉 田
9	1)~7)	アレルギー疾患や自己免疫疾患の薬物治療に関する最新の論文を読み、内容について討議する。	演習・SGD	吉 田
10	1)~7)	アレルギー疾患や自己免疫疾患の薬物治療に関する最新の論文を読み、内容について討議する。	演習・SGD	吉 田
11	1)~7)	アレルギー疾患や自己免疫疾患の薬物治療に関する最新の論文を読み、内容について討議する。	演習・SGD	吉 田
12	1)~7)	アレルギー疾患や自己免疫疾患の治療法に関する論文を検索し、内容を討議する。	演習・SGD	吉 田
13	1)~7)	アレルギー疾患や自己免疫疾患の治療法に関する論文を検索し、内容を討議する。	演習・SGD	吉 田
14	1)~7)	アレルギー疾患や自己免疫疾患の治療法に関する論文の内容を発表し、薬剤師(医療従事者)としての関わりについて討議する。	演習・SGD	吉 田
15	1)~7)	アレルギー疾患や自己免疫疾患の治療法に関する論文の内容を発表し、薬剤師(医療従事者)としての関わりについて討議する。	演習・SGD	吉 田
教科書(著者名)出版社名【ISBN】		なし		
参考書(著者名)出版社名【ISBN】		なし。		

科目名	薬品作用学特論 I			授業コード	220024BDP1	単位数 (時間数)	2 単位 (30)
配当学科(学年)	医療薬学研究科(1・2・3 年)			ナンバリング		AL 科目	○
担当者	鳥取部直子(薬・薬)、松本貴之 (薬・薬)、大倉正道(薬・薬)、楠瀬 直喜(薬・薬) (今年度の担当者を授業計画に記載)	開講学期	2025 年度 後期	必修・選択	選 択	授業形態	講義、実習、SGD
授業の概要・一般 目標・対応するポ リシーNo.	<p>医薬品は、病態の改善に劇的な役割を果たす一方で、副作用が発生し、この副作用そのものが患者に重篤な問題を引き起こすことがある。そのため、医薬品の適正使用において副作用発現の予測、評価、そして判断は、その安全性の確保において不可欠となる。薬品作用学特論では、医薬品の安全性について、十分な科学的根拠に基づき予測、評価、判断するための能力を総合的に活用することで、医療人として最善の職責を果たし、臨床現場において指導的立場に立てるよう(DP3)、薬理学に関する知識を修得する。</p> <p>具体的には、主要な疾患の分子メカニズムを含めた様々な病態を学び、それらの治療薬の薬理作用・作用機序から、特に副作用発現の予測、評価、そして判断ができる能力を修得する。近年の生命科学の進歩を見据え、薬物の作用機序については、臨床生化学に基づく病態生理学の知識も含めた分子レベルでの作用を見極める能力を修得する。さらに、特に、薬品作用学特論 I では、眼、心臓血管疾患と平滑筋薬理を取り上げ、それに基づき治療薬の副作用発現の予測、評価、そして判断ができる能力を培うことを目的とする。</p> <p>ディプロマポリシー、DP との関連性 DP3: 寄与率 100%</p> <p>関連科目 この科目を学ぶために関連の強い科目: 1~3 年次「薬品作用学特論 II」 この科目を学んだあとにつなげる科目: 2~3 年次「医療薬学基礎演習 II」</p>						
学修目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 医薬品の主作用・副作用が発現する機序を概説できる。 2) 緑内障治療薬、散瞳薬、縮瞳薬などの検査薬を必要とする疾患の病態を概説できる。 3) 眼・心臓血管疾患について、治療薬および検査薬に求められる作用機序を病態に基づき説明できる。 4) 眼・心臓血管疾患治療薬および検査薬の副作用や使用上の問題点を列挙できる。 5) 主な眼・心臓血管疾患治療薬および検査薬の副作用の発現機序を薬理作用と関連させ説明できる。 6) 主な眼・心臓血管疾患治療薬および検査薬について、副作用の発現を病態と併用薬の観点から推測できる。 7) 主な眼・心臓血管疾患治療薬および検査薬について、副作用を防止・改善する方法を討議し説明できる。 						
実務経験のある 教員による教育	特になし						
評価及びフィード バックの方法	<p>【評価】 3 回のレポートおよび口頭発表を総合的に評価して単位認定を行う。</p> <p>【フィードバック】 提出レポートについての講評・解説については、次回以降の授業時に行う。口頭発表についてのフィードバックは随時行う。</p>						
準備学習・ 履修上の注意等	授業内容の項目について、講義内容のまとめを作成して復習を行うこと。なお、課題の提出物は、学期末の学習成果フィードバックに使用するので、各自で保管すると共に復習に活用すること。						
オフィスアワー	鳥取部(第 I 薬理学講座) 大倉(分子生物学講座) 比佐(基礎薬理学研究室) 研究室ドアに掲示する。						
授業計画							
回数	学修 目標 No.	授 業 内 容				授業 方法	担当
1	1)	医薬品の作用を薬理学的実験で観察し、説明する。				実習・SGD	鳥取部
2	2-4)	病態と薬物治療に関する知識を確認し、説明する。				講 義	鳥取部
3	2-4)	薬物治療に関する最新の研究内容を検索し、討議する。				S G D	鳥取部
4	3-5)	薬物治療の問題点をあげ課題を設定し、討議する。				S G D	鳥取部
5	6)7)	課題に基づいて学習の主題を設定し、その意義を発表して討議する。				S G D	松 本
6	5-7)	学習主題に関連する最新の英文論文を検索し、選択して討議する。				S G D	松 本
7	5-7)	論文を読み内容について討議する。				S G D	松 本
8	5-7)	論文を読み内容について討議する。				S G D	松 本
9	5-7)	学習の主題との関連から、論文の内容を要約し、発表して討議する。				S G D	大 倉
10	5-7)	論文を読み内容について討議する。				S G D	大 倉
11	5-7)	論文を読み内容について討議する。				S G D	長 野
12	5-7)	学習の主題との関連から、論文の内容を要約し、発表して討議する。				S G D	長 野
13	5-7)	学習の主題についてレポートを作成して討議する。				S G D	楠 瀬
14	1-7)	学習の主題について発表し、討議する。				S G D	楠 瀬

15	1-7)	学習の主題について発表し、討議する。	S G D	鳥取部
教科書(著者名)出版社名【ISBN】		なし		
参考書(著者名)出版社名【ISBN】		必要に応じレジュメを配布。		

科目名	薬品作用学特論Ⅱ			授業コード	220025BDP1	単位数 (時間数)	2 単位 (30)
配当学科(学年)	医療薬学研究科(1・2・3年)			ナンバリング		AL 科目	○
担当者	松本貴之(薬・薬)、鳥取部直子 (薬・薬)、長野貴之(薬・薬)、楠瀬 直喜(薬・薬) (今年度の担当者を授業計画に記載)	開講学期	2025 年度 後期	必修・選択	選 択	授業形態	講義、SGD
授業の概要・一般 目標・対応するポ リシーNo.	<p>医薬品は、病態の改善に劇的な役割を果たす一方で、副作用が発生し、この副作用そのものが患者に重篤な問題を引き起こすことがある。そのため、医薬品の適正使用において副作用発現の予測、評価、そして判断は、その安全性の確保において不可欠となる。薬品作用学特論では、医薬品の安全性について、十分な科学的根拠に基づき予測、評価、判断するための能力を総合的に活用することで、医療人として最善の職責を果たし、臨床現場において指導的立場に立てるよう(DP3)、薬理学に関する知識を修得する。</p> <p>具体的には、主要な疾患の分子メカニズムを含めた様々な病態を学び、それらの治療薬の薬理作用・作用機序から、特に副作用発現の予測、評価、そして判断ができる能力を修得する。近年の生命科学の進歩を見据え、薬物の作用機序については、臨床生化学に基づく病態生理学の知識も含めた分子レベルでの作用を見極める能力を修得する。さらに、特に、薬品作用学特論Ⅱでは、循環器系疾患と神経・血管系・腎薬理を取り上げ、治療薬の副作用発現の予測、評価、そして判断ができる能力を培うことを目的とする。</p> <p>ディプロマポリシー、DP との関連性 DP3: 寄与率 100%</p> <p>関連科目 この科目を学ぶために関連の強い科目: 1~3 年次「薬品作用学特論Ⅰ」 この科目を学んだあとにつなげる科目: 2~3 年次「医療薬学基礎演習Ⅱ」</p>						
学修目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 医薬品の主作用・副作用が発現する機序を概説できる。 2) 心不全、不整脈、狭心症、心筋梗塞、高血圧症の病態を概説できる。 3) 各循環器系疾患について、治療薬に求められる作用機序を病態に基づき説明できる。 4) 循環器系疾患治療薬の副作用や使用上の問題点を列挙できる。 5) 主な循環器系疾患治療薬の副作用の発現機序を薬理作用と関連させ説明できる。 6) 主な循環器系疾患治療薬について、副作用の発現を病態と併用薬の観点から推測できる。 7) 主な循環器系疾患治療薬について、副作用を防止・改善する方法を討議し説明できる。 						
実務経験のある 教員による教育	特になし。						
評価及びフィード バックの方法	レポートおよび口頭発表を総合的に評価する。						
準備学習・ 履修上の注意等	積極的に討議へ参加すること。ネットワークに繋がる PC を各自用意すること。 毎回課題を出すので、次回の授業までに完成させておくこと。						
オフィスアワー	各授業日 17:00~19:00 (各担当者居室)						
授業計画							
回数	学修 目標 No.	授 業 内 容				授 業 方法	担当
1	1)2)3)	病態と薬物治療の概略				講義・SGD	松 本
2	1)2)3)	発表と質疑応答、レポート作成				S G D	松 本
3	3)4)5)	治療薬の種類と作用 (1) 討議				講義・SGD	鳥取部
4	3)4)5)	治療薬の種類と作用 (2) 討議・発表資料作成				S G D	鳥取部
5	3)4)5)	治療薬の種類と作用 (3) 討議・情報収集・発表資料作成				S G D	鳥取部
6	3)4)5)	発表と質疑応答、レポート作成				S G D	鳥取部
7	4)5)6)	治療薬の問題点 (1) 討議				講義・SGD	長 野
8	4)5)6)	治療薬の問題点 (2) 討議・発表資料作成				S G D	長 野
9	4)5)6)	治療薬の問題点 (3) 討議・情報収集・発表資料作成				S G D	長 野
10	4)5)6)	発表と質疑応答、レポート作成				S G D	長 野
11	5)6)7)	治療薬の問題点への対処 (1) 討議				講義・SGD	楠 瀬
12	5)6)7)	治療薬の問題点への対処 (2) 討議・発表資料作成				S G D	楠 瀬
13	5)6)7)	治療薬の問題点への対処 (3) 討議・情報収集・発表資料作成				S G D	楠 瀬
14	5)6)7)	発表と質疑応答、レポート作成				S G D	楠 瀬
15	1)~7)	まとめ				S G D	松 本
教科書(著者名)出版社名【ISBN】	なし						
参考書(著者名)出版社名【ISBN】	必要に応じレジュメを配布。						

科目名	医療公衆衛生薬学特論			授業コード	220026BDP1	単位数 (時間数)	2 単位 (30)	
配当学科(学年)	医療薬学研究科(1・2・3 年)			ナンバリング		AL 科目	○	
担当者	木村博昭(薬・薬)、白崎哲哉(薬・薬)、甲斐久博(薬・薬)	開講学期	2025 年度 後 期	必修・選択	選 択	授業形態	講義、SGD	
授業の概要・一般 目標・対応するホ リソNo.	医療の観点から、身の回りに存在する種々の環境要因(食品、有害化学物質、環境汚染物質、生活習慣等)と健康・疾病との関連を学び、十分な科学的根拠に基づき、健康の維持・増進および疾病の予測、評価、判断ができる能力を培うことは重要である。医療公衆衛生薬学特論では、栄養・食品、保健統計と疫学、感染症、生活習慣病、職業病、毒性学等について学び、各種環境要因の疾病予防効果、安全性・毒性の予測・評価ができ、QOL の向上および疾病の予防のための方策が提言できる能力を培うことを目的とする。							
学修目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 身の回りの種々の環境要因を列挙し、各要因と健康・疾病との関連を概説できる。 2) 栄養素および食品と健康・疾病との関連を概説できる。 3) 有害化学物質の毒性発現機構および毒性の予測・評価法について概説できる。 4) 環境汚染物質が列挙でき、汚染防止対策について概説できる。 5) 生活習慣のリスクファクターを列挙でき、その予防法を生活習慣と関連づけて説明できる。 6) 保健統計指標を列挙し、各指標の意義について説明できる。 7) 疫学的研究手法について概説でき、研究手法として利用できる。 8) 感染症や関連する法律について概説できる。 							
実務経験のある 教員による教育	該当なし							
評価及びフィード バックの方法	レポートおよび口頭発表により、総合的に単位認定を行う。							
準備学習・ 履修上の注意等	討論等に積極的に参加する。また、授業時間外を使って、レポート・発表の準備等、15 時間の学習を行うこと。							
オフィスアワー	木村:月曜 16:30~17:30(M610 研究室)							
授業計画								
回 数	学修 目標 No.	授 業 内 容					授 業 方 法	担 当
1	1)~3)	「健康と環境」概論					講 義	木 村
2	5)6)	「公衆衛生学」概論					講 義	木 村
3	7)	疫学的手法					S G D	木 村
4	1)~8)	環境要因・生活習慣と疾病・感染症との関連についてのレポート作成・討議課題に基づいて学習の主題を設定し、その意義の発表・討議					S G D	木 村
5	1)~8)	環境要因・生活習慣と疾病・感染症との関連についてのレポート作成・討議課題に基づいて学習の主題を設定し、その意義の発表・討議					S G D	白 崎
6	1)~8)	環境要因・生活習慣と疾病・感染症との関連についてのレポート作成・討議課題に基づいて学習の主題を設定し、その意義の発表・討議					S G D	白 崎
7	1)~8)	環境要因・生活習慣と疾病・感染症との関連についてのレポート作成・討議課題に基づいて学習の主題を設定し、その意義の発表・討議					S G D	白 崎
8	1)~8)	環境要因・生活習慣と疾病・感染症との関連についてのレポート作成・討議課題に基づいて学習の主題を設定し、その意義の発表・討議					S G D	白 崎
9	1)~8)	環境要因・生活習慣と疾病・感染症との関連についてのレポート作成・討議課題に基づいて学習の主題を設定し、その意義の発表・討議					S G D	甲 斐
10	1)~8)	環境要因・生活習慣と疾病・感染症との関連についてのレポート作成・討議課題に基づいて学習の主題を設定し、その意義の発表・討議					S G D	甲 斐
11	1)~8)	環境要因・生活習慣と疾病・感染症との関連についてのレポート作成・討議課題に基づいて学習の主題を設定し、その意義の発表・討議					S G D	甲 斐
12	1)~8)	環境要因・生活習慣と疾病・感染症との関連についてのレポート作成・討議課題に基づいて学習の主題を設定し、その意義の発表・討議					S G D	甲 斐
13	1)~8)	環境要因・生活習慣と疾病・感染症との関連についてのレポート作成・討議課題に基づいて学習の主題を設定し、その意義の発表・討議					S G D	木 村
14	1)~8)	環境要因・生活習慣と疾病・感染症との関連についてのレポート作成・討議課題に基づいて学習の主題を設定し、その意義の発表・討議					S G D	木 村
15	1)~8)	環境要因・生活習慣と疾病・感染症との関連についてのレポート作成・討議課題に基づいて学習の主題を設定し、その意義の発表・討議					S G D	木 村
教科書(著者名)出版社名【ISBN】		なし						
参考書(著者名)出版社名【ISBN】		必要に応じレジュメを配布。						

科目名	医療薬学基礎演習Ⅱ			授業コード	220027BDP1	単位数 (時間数)	2 単位 (30)
配当学科(学年)	医療薬学研究科(2・3 年)			ナンバリング		AL 科目	○
担当者	木村博昭(薬・薬)、松本貴之(薬・薬)、白崎哲哉(薬・薬)、鳥取部直子(薬・薬)、吉田裕樹(薬・薬)、甲斐久博(薬・薬) (今年度の担当者は授業計画に記載)	開講学期	2025 年度 前期	必修・選択	必 修	授業形態	SGD, 演習
授業の概要・一般目標・対応するポリシーNo.	臨床現場で医薬品の安全性について正しく理解・評価するために、レギュラトリーサイエンスの安全性の概念に基づき業務を最適化していく能力が必修なる。医療薬学基礎演習Ⅱでは、疾患を引き起こす可能性の予測、評価、判断する能力を養い、病態や薬効を客観的に評価することで医療の実践と進歩に貢献できる薬剤師となるために、充分な科学的根拠に基づく予測・評価・判断能力を総合的に活用できる能力を修得する。						
学修目標	1) 病院薬局において、安全性にかかわる大きな問題点を挙げ、解決策、手法、結果の精査方法を討論する。 2) 保険薬局において、安全性にかかわる大きな問題点を挙げ、解決策、手法、結果の精査方法を討論する。 3) 在宅医療において、安全性にかかわる大きな問題点を挙げ、解決策、手法、結果の精査方法を討論する。						
実務経験のある教員による教育	科目担当者(比佐・吉田)は、臨床現場や研究機関での実務経験に基づき、医薬品の安全性を正しい評価法の修得を目的とした授業を行う。						
評価及びフィードバックの方法	毎授業後に行う簡単な口頭試問やレポートにより、学習の進捗状況を把握し、フィードバックを行う。学習への取り組み姿勢(レポート、プロダクト評価や口頭試問時の理解度、授業態度)の評点を 100%として単位認定を行う。評価の基準は授業開始日に説明する。						
準備学習・履修上の注意等	基礎知識を含めて毎回の授業での疑問点があれば些細なことでも質問するなどしてすぐに解決する態度が必要。授業時間外に 15 時間の学習を行うこと。						
オフィスアワー	各担当教員のオフィスアワーと同じである。						

授業計画

回数	学修目標 No.	授 業 内 容	授 業 方 法	担 当
1	1)	病院薬局業務における医薬品の安全性に対する予測・判断・評価を最適化できる(1)。	演 習	吉 田
2	1)	病院薬局業務における医薬品の安全性に対する予測・判断・評価を最適化できる(2)。	演 習	吉 田
3	1)	病院薬局業務における医薬品の安全性に対する予測・判断・評価を最適化できる(3)。	演 習	鳥取部
4	1)	病院薬局業務における医薬品の安全性に対する予測・判断・評価を最適化できる(4)。	演 習	鳥取部
5	2)	保険薬局業務における医薬品の安全性に対する予測・判断・評価を最適化できる(1)。	演 習	松 本
6	2)	保険薬局業務における医薬品の安全性に対する予測・判断・評価を最適化できる(2)	演 習	松 本
7	2)	保険薬局業務における医薬品の安全性に対する予測・判断・評価を最適化できる(3)	演 習	白 崎
8	2)	保険薬局業務における医薬品の安全性に対する予測・判断・評価を最適化できる(4)	演 習	白 崎
9	3)	在宅医療業務における医薬品の安全性に対する予測・判断・評価を最適化できる(1)	演 習	木 村
10	3)	在宅医療業務における医薬品の安全性に対する予測・判断・評価を最適化できる(2)	演 習	木 村
11	3)	在宅医療業務における医薬品の安全性に対する予測・判断・評価を最適化できる(3)	演 習	甲 斐
12	3)	在宅医療業務における医薬品の安全性に対する予測・判断・評価を最適化できる(4)	演 習	甲 斐
13	1, 2, 3)	薬剤師業務において医薬品の安全性に対する予測・判断・評価を最適化できる(1)	演 習	黒 川
14	1, 2, 3)	薬剤師業務において医薬品の安全性に対する予測・判断・評価を最適化できる(2)	演 習	黒 川
15	1, 2, 3)	薬剤師業務において医薬品の安全性に対する予測・判断・評価を最適化できる(3)	演 習	黒 川

教科書(著者名)出版社名【ISBN】	なし
参考書(著者名)出版社名【ISBN】	必要に応じレジュメを配布。

科目名	臨床薬学特論 I			授業コード	220028BDP1	単位数 (時間数)	2 単位 (30)
配当学科(学年)	医療薬学研究科(1・2・3 年)			ナンバリング		AL 科目	○
担当者	鈴木 彰人(薬・薬)、園田 純一郎 (薬・薬)、日高 宗明(薬・薬)、高 村 徳人(薬・薬)、緒方 賢次(薬・ 薬)、興梠 靖幸(薬・薬)	開講学期	2025 年度 前期	必修・選択	選 択	授業形態	講義、SGD
授業の概要・一般 目標・対応するホ リゾンNo.	<p>臨床の現場では、医薬品を適正に使用することが特に重要である。その実現のために薬剤師は、疾病や薬物に対する最新の知識を基に、患者への服薬指導や医療従事者への医薬品情報提供・使用方法提案などの指導や提案を行うことになる。従って、個々の患者に対する薬物療法の有効性を予測、評価そして判断する能力は、指導的立場に立つ薬剤師にとって不可欠なものである。</p> <p>臨床薬学特論 I では、医薬品適正使用のために、個々の患者における薬物療法の効果を科学的根拠に基づいて予測、評価そして判断できる能力を培うことを目的に、服薬指導事項や重要な薬物相互作用とその回避方法についての科学的根拠の解明、お薬手帳など医薬品適正使用サポート手段の役割とその有効な活用方法等について修得する。また、セルフメディケーションにおける医薬品適正使用に重要な事項とその科学的根拠についても修得する。</p> <p>ディプロマ・ポリシー(DP)との関連性 DP4(医薬品の有効性の予測、評価、判断能力): 寄与率 100%</p>						
学修目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 医薬品の効果及び副作用の発現を適切に予測できる。 2) 医薬品の効果及び副作用を適切に評価できる。 3) 医薬品の効果及び副作用評価後の対応を適切に判断できる。 4) 服薬指導の根拠について説明できる。 5) 薬物相互作用の根拠と回避方法について説明できる。 6) セルフメディケーションの適切な実施方法について説明できる。 7) 医薬品適正使用サポート手段について列挙し、概説できる。 						
実務経験のある 教員による教育	担当教員は全員が医療現場で薬物治療の計画・提案や評価に携わった経験を有している。本授業では、これらの実務経験を活かして医薬品適正使用に基づく治療効果の予測、評価、判断にかかわる能力向上の指導にあたる。						
評価及びフィード バックの方法	口頭発表/質疑応答、またはレポート提出により総括的評価を行い単位認定する。 毎時間終了時にフィードバックを行う。						
準備学習・ 履修上の注意等	授業の前後および休日を利用して、授業 1 コマ当たり約 1 時間以上、関連事項の学習を行うこと。						
オフィスアワー	在室時適宜						
授業計画							
回数	学修 目標 No.	授 業 内 容				授業 方法	担当
1	1)~4)	服薬指導事項に関する知識を確認し、理解する。				講 義	鈴 木
2	1)~4)	服薬指導に関する論文を読み内容について討議する。				S G D	鈴 木
3	1)~4)	服薬指導に関する論文を読み内容について討議する。				S G D	日 高
4	1)~4)	服薬指導の科学的根拠について要約し、発表して討議する。				S G D	日 高
5	1)2)3) 5)	薬物相互作用に関する知識を確認し、理解する。				講 義	園 田
6	1)2)3) 5)	薬物相互作用に関する論文を読み内容について討議する。				S G D	園 田
7	1)2)3) 5)	薬物相互作用に関する論文を読み内容について討議する。				S G D	園 田
8	1)2)3) 5)	薬物相互作用の科学的根拠について要約し、発表して討議する。				S G D	高 村
9	1)2)3) 6)	セルフメディケーションに関する知識を確認し、理解する。				講 義	高 村
10	1)2)3) 6)	セルフメディケーションに関する論文を読み内容について討議する。				S G D	緒 方
11	1)2)3) 6)	セルフメディケーションに関する論文を読み内容について討議する。				S G D	緒 方
12	1)2)3) 6)	セルフメディケーションの科学的根拠について要約し、発表して討議する。				S G D	緒 方
13	1)2)3) 7)	医薬品適正使用サポート手段に関する知識を確認し、理解する。				講 義	興 梠
14	1)2)3) 7)	医薬品適正使用サポート手段に関する論文を読み内容について討議する。				S G D	興 梠
15	1)2)3) 7)	医薬品適正使用サポート手段について要約し、発表して討議する。				S G D	興 梠
教科書(著者名)出版社名【ISBN】	なし						
参考書(著者名)出版社名【ISBN】	必要に応じレジュメを配付する。						

科目名	臨床薬学特論Ⅱ			授業コード	220029BDP1	単位数 (時間数)	2単位 (30)
配当学科(学年)	医療薬学研究科(1・2・3年)			ナンバリング		AL科目	○
担当者	鈴木 彰人(薬・薬)、園田 純一郎 (薬・薬)、日高 宗明(薬・薬)、高 村 徳人(薬・薬)、緒方 賢次(薬・ 薬)、興梠 靖幸(薬・薬)	開講学期	2025年度前期	必修・選択	選 択	授業形態	演習・SGD
授業の概要・一般 目標・対応するポ リシーNo.	<p>チーム医療において、薬剤師には疾患や医薬品に関する最新かつ十分な情報に基づいて薬学的患者ケアを実践する姿勢が求められる。すなわち、薬剤師は個々の患者の薬物療法の問題を把握し、医薬品情報を臨床応用して薬学的提案を行うという任務を担っている。</p> <p>臨床薬学特論Ⅱでは、個々の患者における治療効果を科学的根拠に基づいて予測、評価そして判断できる能力を培うことを主な目的とする。指導的立場に立ち医療により貢献できる薬剤師になるために、症例の提示に対して患者の病態および薬物治療を科学的根拠に基づいて評価する能力を身に付け、治療の有効性や有害性の科学的評価法、薬物体内動態評価法、栄養評価法、また臨床試験実施のための試験計画法などを修得する。</p> <p>ディプロマ・ポリシー(DP)との関連性 DP4(医薬品の有効性の予測、評価、判断能力): 寄与率 100%</p>						
学修目標	<ol style="list-style-type: none"> 1) 臨床検査値、検査所見、理学所見などから患者の問題点を判断し、解決策を提案できる。 2) 治療薬物の血中濃度解析および臨床検査値に基づいて処方設計ができる。 3) 薬物動態に影響を及ぼす要因を列挙し、それについて説明できる。 4) 科学的根拠に基づいた最適な治療法の提案ができる。 5) 薬物治療におけるファーマコビジランスの意義を説明できる。 6) 薬物療法または栄養治療における治療効果を適正に評価するための試験計画を立案できる。 						
実務経験のある 教員による教育	担当教員は全員が医療現場で薬物治療の計画・提案や評価に携わった経験を有している。本授業では、これらの実務経験を活かして医薬品適正使用に基づく治療効果の予測、評価、判断にかかわる能力向上の指導にあたる。						
評価及びフィード バックの方法	口頭発表/質疑応答、またはレポート提出により総括的評価を行い単位認定する。 毎時間終了時にフィードバックを行う。						
準備学習・ 履修上の注意等	授業の前後および休日を利用して、授業1コマ当たり約1時間以上、関連事項の学習を行うこと。						
オフィスアワー	在室時適宜						
授業計画							
回数	学修 目標 No.	授 業 内 容				授 業 方法	担 当
1	1)4)	症例提示(1):患者の臨床状態の問題点を挙げ、その対策を提案する。				演習・SGD	鈴 木
2	1)4)	症例提示(1):患者の臨床背景から問題解決策の是非を討議する。				演習・SGD	鈴 木
3	1)2)3) 6)	症例提示(1):患者の治療、臨床状態に影響を及ぼす要因を挙げ、その対策を提案し、討議する。				演習・SGD	鈴 木
4	1)4)	症例提示(2):患者の臨床背景から問題解決策の是非を討議する。				演習・SGD	高 村
5	1)~4)	症例提示(2):治療薬の血中濃度や臨床検査値に基づいて適切な治療プランを立案する。				演習・SGD	高 村
6	2)3)4) 6)	症例提示(2):患者個別の投与プランの妥当性を論文に基づいて討議する。				演習・SGD	高 村
7	1)4)	症例提示(3):薬物療法における問題点を挙げ、その対策を提案する。				演習・SGD	園 田
8	4)5)	症例提示(3):患者治療における問題解決策の是非を討議する。				演習・SGD	園 田
9	4)~6)	症例提示(3):医薬品の使用実態データ等をもとに最適な治療法を提案し、討議する。				演習・SGD	園 田
10	1)4)	症例提示(4):患者の臨床状態の問題点を挙げ、その対策を提案する。				演習・SGD	緒 方
11	3)4)6)	症例提示(4):科学的根拠に基づいて最適な治療法を提案し、討議する。				演習・SGD	緒 方
12	1)4)	症例提示(5):患者の臨床状態の問題点を挙げ、その対策を提案する。				演習・SGD	興 梠
13	3)4)6)	症例提示(5):薬物療法における治療効果の評価法について提案し、討議する。				演習・SGD	興 梠
14	3)4)	症例提示(6):患者の臨床状態の問題点を挙げ、その対策を提案する。				演習・SGD	日 高
15	3)4)6)	症例提示(6):論文に基づいて薬物動態に影響を及ぼす要因を列挙し、討議する。				演習・SGD	日 高
教科書(著者名)出版社名【ISBN】	なし						
参考書(著者名)出版社名【ISBN】	必要に応じレジュメを配付する。						

科目名	フィジカルアセスメント特論			授業コード	220030BDP1	単位数 (時間数)	2 単位 (30)
配当学科(学年)	医療薬学研究科(1・2・3 年)			ナンバリング		AL 科目	○
担当者	高村徳人(薬・薬)、徳永仁(薬・薬)、緒方賢次(薬・薬)、興枙靖幸(薬・薬)	開講学期	2025 年度 前期	必修・選択	選 択	授業形態	講義、実習、SGD
授業の概要・一般 目標・対応するホ リソーNo.	これからの薬剤師業務においては、治療薬の有効性の予測、評価、判断ができる臨床能力に長けた薬剤師を養成するために、バイタルサインなどの生体反応を正確に把握できるフィジカルアセスメント技術の習得が不可欠である。フィジカルアセスメント特論では、ベッドサイドを含む臨床の場において治療薬の有効性および有害反応の生体反応および病態を把握するためのフィジカルアセスメントについて学ぶことを目的としている。 ディプロマポリシー(DP)との関連性 DP3: 寄与率 100%						
学修目標	1) フィジカルアセスメントを概説できる。 2) 病態とフィジカルアセスメントの関係を説明できる。 3) 薬物の副作用を早期に発見するためのフィジカルアセスメントについて説明できる。 4) 心音と心疾患の関係を説明できる。 5) 心不全について説明できる。						
実務経験のある 教員による教育	実務経験のある薬剤師と医師が担当し、臨床に役立つ業務や工夫について思考する能力を養うことを目的として講義、SGD および演習を行う。						
評価及びフィード バックの方法	口頭発表／質疑応答、またはレポート提出により総括的評価を行い単位認定する。毎時間終了時にフィードバックを行う。詳細な評価の基準は授業開始日にそれぞれの担当の教員より説明する。						
準備学習・ 履修上の注意等	授業時間外に 15 時間の学習を行うこと。						
オフィスアワー	講義の前後に講義した場所で行う。						
授業計画							
回数	学修 目標 No.	授 業 内 容				授業 方法	担当
1	1)	フィジカルアセスメントを理解する。				講義・SGD	徳 永
2	2)	病態とフィジカルアセスメントの関係を理解する。				S G D	徳 永
3	3)	薬物の副作用を早期に発見するためのフィジカルアセスメントについて理解できる。				S G D	徳 永
4	1)~3)	学習の主題について討議する。				S G D	徳 永
5	4)	心臓の構造について理解できる。				S G D	高 村
6	4)	過剰心音と心臓の状態について理解し説明できる。				S G D	高 村
7	4)5)	心雑音と心臓の状態について理解し説明できる。 心不全について理解できる。				S G D	高 村
8	4)5)	学習の主題について討議する。				S G D	高 村
9	2)3)	薬物の薬効や副作用を早期に発見するためのフィジカルアセスメントについて理解できる(1)。				S G D	緒 方
10	2)3)	薬物の薬効や副作用を早期に発見するためのフィジカルアセスメントについて理解できる(2)。				S G D	緒 方
11	2)3)	薬物の薬効や副作用を早期に発見するためのフィジカルアセスメントについて理解できる(3)。				S G D	緒 方
12	2)3)	学習の主題について討議する。				S G D	緒 方
13	1)~3)	学生の研究主題とフィジカルアセスメントの関係性について討議し、関連論文を調査・収集する。				S G D	興 枙
14	1)~3)	学生の研究主題とフィジカルアセスメントに関する論文を読み、論文内のデータ解析方法について討議する。				S G D	興 枙
15	1)~3)	学生の研究主題とフィジカルアセスメントに関する論文を要約し、発表して討議する。				S G D	興 枙
教科書(著者名)出版社名【ISBN】		使用しない。					
参考書(著者名)出版社名【ISBN】		必要に応じレジュメを配布。 薬のうごきを「みえる化」する: 一目で伝わる ADME 図鑑(南山堂): 高村が担当の時使用					

科目名	感染症治療薬学特論			授業コード	220031BDP1	単位数 (時間数)	2 単位 (30)
配当学科(学年)	医療薬学研究科(1・2・3 年)			ナンバリング		AL 科目	○
担当者	木村博昭(薬・薬)、大倉正道(薬・薬)	開講学期	2025 年度 前期	必修・選択	選 択	授業形態	講義、演習、SGD
授業の概要・一般 目標・対応するホ リゾンNo.	医療の観点から、感染症の基礎(感染症の歴史や感染症が起こるしくみ、感染症法など)や感染症の各論(感染症の分類及び種類、感染症各論、感染症の防御方法など)を学習し、感染症に関する最新の情報について調査し、対応策を考えることができる能力を身につけることを目標とする。						
学修目標	1)古に起こった感染症から最近のパンデミックまでを含めた感染症の歴史について概説できる。 2)免疫からの観点も含めて感染症が起こるしくみを概説できる。 3)感染症法(感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律)について概説でき、感染症の分類について説明できる。 4)検疫感染症について概説できる。 5)感染症の防御法(予防法を含む)について概説できる。 6)特定の細菌感染症について概説できる。 7)特定のウイルス感染症について概説できる。 8)細菌、ウイルス以外の特定の感染症について概説できる。 9)新たな感染症/パンデミックが起こったときの対応法について考えることができる。 10)1)～9)を踏まえて、感染症実験の論文を読み、データと内容を概説できる。						
実務経験のある 教員による教育	該当なし						
評価及びフィード バックの方法	レポート及び口頭発表等により、総合的に単位認定を行う。						
準備学習・ 履修上の注意等	感染症に関する基礎知識について、あらかじめ学習しておく。 毎回の授業の前後、週末および長期休暇期間を使って、計 60 時間の予習復習を行うこと。						
オフィスアワー	毎週 月～金 16-19 時						
授業計画							
回数	学修 目標 No.	授 業 内 容				授業 方法	担当
1	1)2)	感染症の歴史と感染症が起こるしくみについて学習し、討論する。				講義、SGD	木 村
2	1)2)	感染症の歴史と感染症が起こるしくみについて学習し、討論する。				講義、SGD	木 村
3	3)4)	感染症法と検疫感染症について学習し、討論する。				講義、SGD	木 村
4	3)4)	感染症法と検疫感染症について学習し、討論する。				講義、SGD	木 村
5	5)10)	感染症の防御法について論文等で学習し、発表討論する。				講義、SGD	木 村
6	5)10)	感染症の防御法について論文等で学習し、発表討論する。				講義、SGD	木 村
7	6)10)	特定の細菌感染について論文等で学習し、発表討論する。				講義、SGD	大 倉
8	6)10)	特定の細菌感染について論文等で学習し、発表討論する。				講義、SGD	大 倉
9	7)10)	特定のウイルス感染について論文等で学習し、発表討論する。				講義、SGD	大 倉
10	7)10)	特定のウイルス感染について論文等で学習し、発表討論する。				講義、SGD	大 倉
11	8)10)	細菌・ウイルス以外の感染について論文等で学習し、発表討論する。				講義、SGD	大 倉
12	8)10)	細菌・ウイルス以外の感染について論文等で学習し、発表討論する。				講義、SGD	大 倉
13	9)10)	過去の感染症を振り返ってパンデミック時の対応について学習し、発表討論する。				講義、SGD	木 村
14	9)10)	過去の感染症を振り返って、新たなパンデミックが起きたときの対応について学習し、発表討論する。				講義、SGD	木 村
15	9)10)	過去の感染症を振り返って、新たなパンデミックが起きたときの対応について学習し、発表討論する。				講義、SGD	木 村
教科書(著者名)出版社名【ISBN】		使用しない					
参考書(著者名)出版社名【ISBN】		必要に応じレジュメを配布。					

科目名	医療薬学基礎演習Ⅲ			授業コード	220032BDP1	単位数 (時間数)	2 単位 (30)
配当学科(学年)	医療薬学研究科(2・3 年)			ナンバリング		AL 科目	○
担当者	徳永仁(薬・薬)、高村徳人(薬・薬)、鈴木彰人(薬・薬)、園田純一郎(薬・薬)、日高宗明(薬・薬)、緒方賢次(薬・薬)	開講学期	2025 年度 後期	必修・選択	必 修	授業形態	SGD, 演習
授業の概要・一般目標・対応するポリシーNo.	医療薬学基礎演習Ⅲでは、これまで学んできた医薬品の有効性についての十分な科学的根拠に基づく予測・評価・判断能力を総合的に活用できることを目的としている。即ち、薬剤師業務の中で、レギュラトリーサイエンスの有効性の概念に基づき業務を最適化していく能力の向上を目指す。具体的には、医療現場での種々の設定におけるシミュレーションを演習形式で体験し、病院薬局、保険薬局、在宅医療の場において、問題点を抽出し検討課題を設定でき、課題遂行の手法を選択し実施する能力、検討結果を客観的に評価し総括する能力を修得する。これらの修得により、自己研鑽に努め、問題点や社会的動向を把握し、解決に向けて取り組む姿勢を持つとともに、次世代を担う人材の養成を行い、薬学・医療の進歩と改善に貢献できる(DP5)。						
学修目標	1) 病院薬局において、レギュラトリーサイエンスの有効性の概念に基づき業務を最適化できる。 2) 保険薬局において、レギュラトリーサイエンスの有効性の概念に基づき業務を最適化できる。 3) 在宅医療において、レギュラトリーサイエンスの有効性の概念に基づき業務を最適化できる。						
実務経験のある教員による教育	担当教員の多くは医療現場での勤務経験があるものもあり、患者や医師・看護師など、医療現場のスタッフとのコミュニケーションをとりながら実務経験を積んでいる。このため、患者・来局者、他の医療従事者とのコミュニケーションを実践的に、かつ一貫して図ることができ、その経験を生かして学生に教育できる。						
評価及びフィードバックの方法	学習への取り組みの姿勢(課題の提出状況、出席状況、授業態度)(約 50 点)、口頭発表(約 50 点)を総合的に評価し、60 点以上を単位認定する。						
準備学習・履修上の注意等	毎回の授業の前後、週末および長期休暇を使って、計 60 時間の予習・復習を行うこと。予習の具体例としては、配布プリントの問題に関する医薬品については、あらかじめ添付文書をダウンロードするなどである。復習の具体例としては、配布プリントの内容に関してロールプレイを行うことなどである。						
オフィスアワー	毎週月曜～金曜日 各教員が示しているオフィスアワーに準じる。						
授業計画							
回数	学修目標 No.	授 業 内 容				授業方法	担当
1	1)	病院薬局業務における医薬品の有効性の予測ができる。				演 習	鈴 木
2	1)	病院薬局業務における医薬品の有効性の評価ができる。				S G D	鈴 木
3	1)	病院薬局業務における医薬品の有効性の判断ができる。				演 習	日 高
4	1)	病院薬局業務における医薬品の有効性の最適化ができる。				S G D	日 高
5	2)	保険薬局業務における医薬品の有効性を総合的に討議する。				演 習	徳 永
6	2)	保険薬局業務における医薬品の有効性の予測ができる。				S G D	徳 永
7	2)	保険薬局業務における医薬品の有効性の評価ができる。				演 習	徳 永
8	2)	保険薬局業務における医薬品の有効性の判断ができる。				S G D	徳 永
9	2)	保険薬局業務における医薬品の有効性の最適化ができる。				演 習	園 田
10	2)	保険薬局業務における医薬品の有効性を総合的に討議する。				S G D	園 田
11	3)	在宅医療業務における医薬品の有効性の予測ができる。				演 習	高 村
12	3)	在宅医療業務における医薬品の有効性の評価ができる。				S G D	高 村
13	3)	在宅医療業務における医薬品の有効性の判断ができる。				演 習	緒 方
14	3)	在宅医療業務における医薬品の有効性の最適化ができる。				S G D	緒 方
15	1-3)	総括				S G D	徳 永
教科書(著者名)出版社名【ISBN】		使用しない					
参考書(著者名)出版社名【ISBN】		必要に応じレジュメを配布。					